

第103回 休日の午後のコンサート

2024.10.14(月・祝)14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
Mon. / Holyday Oct. 14, 2024, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

〈クラシックの車窓からⅡ〉〈From the Classic Train Window Ⅱ〉

指揮とお話 角田鋼亮 Kosuke Tsunoda, conductor & speaker

チェロ 鳥羽咲音* Sakura Toba, cello

コンサートマスター 近藤 薫 Kaoru Kondo, concertmaster

オフエンバック：喜歌劇『天国と地獄』序曲（約10分）

Offenbach: Overture from operetta "Orpheus in the Underworld" (ca. 10 min)

ウェーバー：歌劇『オベロン』序曲（約9分）

Weber: Overture from opera "Oberon" (ca. 9 min)

グルダ：チェロ協奏曲より*（約20分）

Gulda: Excerpts from Concerto for Cello and Wind Orchestra (ca. 20 min)

第1楽章 序曲／第2楽章 牧歌／第5楽章 終曲：行進曲風に

— 休憩 intermission —

E. シュトラウス：ポルカ・シュネル『蒸気をあげて』（約3分）

E. Strauss: Polka schnell "Mit Dampf" (ca. 3 min)

J. シュトラウス：ポルカ・フランセーズ『鍛冶屋のポルカ』（約3分）

Josef Strauss: Polka francaise "Feuerfest!" (ca. 3 min)

E. シュトラウス：ポルカ・シュネル『テープは切られた』（約3分）

E. Strauss: Polka schnell "Bahn frei!" (ca. 3 min)

ヴェルディ：歌劇『アイダ』より「凱旋行進曲」（約8分）

Verdi: Triumphal March from opera "Aida" (ca. 8 min)

J. シュトラウスⅡ：ポルカ・シュネル『観光列車』（約3分）

J. Strauss II: Polka schnell "Vergnügungszug" (ca. 3 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by the Tokyo Philharmonic Orchestra

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動）） | 独立行政法人日本芸術文化振興会
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために ♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール

指揮とお話 角田鋼亮

Kosuke Tsunoda, conductor & speaker

東京藝術大学大学院指揮科修士課程並びにベルリン音楽大学国家演奏家資格課程修了。2008年、カラヤン生誕100周年記念の第4回ドイツ全音楽大学指揮コンクール第2位入賞。ベルリン・コンツェルトハウス管、ブランデンブルグ響、上海歌劇院管、N響、読響、都響、東響、東京フィル、名古屋フィル、京響、大阪フィル、九響等と共演している。2015年よりセントラル愛知交響楽団の指揮者を務め、2019年より常任指揮者に就任。2016-2020年大阪フィルハーモニー交響楽団指揮者、2018-2022年仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者を歴任するなど、いま日本で最も期待される若手指揮者の一人として各地にて活躍の場を拓けている。2024年4月より、セントラル愛知交響楽団音楽監督を務めている。



©Makoto Kamiya

チェロ 鳥羽咲音

Sakura Toba, cello

2005年、音楽家の両親のもと、ウィーンで生まれる。現在19歳。6歳から毛利伯郎、2022年からベルリン芸術大学でJ-P. マインツに師事し、A. メネセスやD. ゲリンガスのマスタークラスにも参加。多くのコンクールで優勝、入賞を果たし、2019年「服部真二音楽賞」受賞。原田幸一郎、大友直人、広上淳一、沼尻竜典、大井剛史、山田和樹、太田弦らの指揮で、読響、日本フィル、群響、横浜シフォニエッタ、富士山静岡響、広響と共演するほか、東京・春・音楽祭をはじめ様々な場でのリサイタルに出演している。使用楽器はアンネ=ゾフィー・ムター財団より貸与された1840年製のジャン=バティスト・ヴィヨーム。2023年にはMutter's Virtuosiのメンバーとしてヨーロッパツアーに参加した。



©Julia Wesely

プログラム・ノート

解説＝柴田克彦

鉄道にちなんだ疾走感あふれるプログラム

今回の「休日の午後のコンサート」は〈クラシックの車窓からII〉。『機関車パシフィック231』などが披露された2023年4月の〈クラシックの車窓から〉に続く、“鉄道関連コンサート”の第2弾です。

本日のプログラムの内、ウィーンの快速ポルカ＝『蒸気をあげて』『テープは切られた』『観光列車』は、いわゆる“鉄オタクラシック”の代表曲。中でも『観光列車』は、この種の企画には欠かせない作品です。ただし今回は鉄道とは直接関係のない楽曲も多く含まれています。でもそれらは推進力に富んだ作品。列車のような疾走感を味わえる音楽が並んでいますし、“鉄”ゆかりの『鍛冶屋のポルカ』も登場するなど、幅広い内容となっています。またグルダのチェロ協奏曲は、ロックやジャズを取り入れた異例なほどノリの良い音楽。ここは俊才・鳥羽咲音のソロも大いなる聴きものです。

本日は、リズムカルな音楽に身を委ねて、爽快な気分に入りましょう。

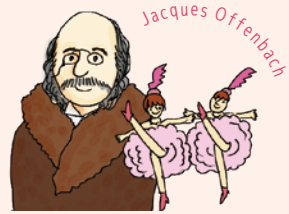


マエストロ角田の指揮とトークとともにクラシックの“鉄道旅行”をお楽しみください

©K.Miura

お馴染みの陽気な“カンカン”で幕開け

ドイツに生まれ、フランスに移ってオペレッタ（喜歌劇）を最初に広めた **ジャック・オッフエンバック**（1819–1880）の喜歌劇『天国と地獄』序曲で、華やかに幕を開けます。『天国と地獄』は、パリにある自身の劇場の財政難を立て直すために書かれ、1858年10月の初演で大成功を収めた彼の代表作。内容は、「離婚寸前の夫婦が地獄で出会い、現世に帰還しようとする」というギリシャ神話「オルフェオとエウリディーチェ」のパロディに、社会風刺を盛り込んだドタバタ劇です。



序曲は劇中の旋律を繋いだ楽しい音楽ですが、実はカール・ビンダーという人が1860年のウィーン上演時に構成した編作物。快活に始まり、緩急の変化の中で種々の楽器のソロが登場後、お馴染みの陽気なギャロップ＝カンカンが繰り返されます。

魔法の角笛を表すホルンから始まる華麗な音楽

おつぎはドイツ・ロマン派の先駆者 **カール・マリア・フォン・ウェーバー**（1786–1826）の歌劇『オベロン』序曲。『オベロン』は、ロンドンのコヴェントガーデン王立歌劇場の依頼で作曲され、1826年4月にウェーバー自身の指揮で初演されました（しかし彼は約2ヶ月後にロンドンで



客死）。本編は、「妖精の王オベロンと王妃が口論し、いかなる困難にも負けずに愛し合う男女を見るまでは和解しないと決める。だが和解したいオベロンは妖精バックと相談。若い男女を魔法で相思相愛の仲にし、危険時に呼ぶよう魔法の角笛を授ける。結局二人は困難を乗り越えて結ばれ、王と王妃も仲直りする」といった魔法劇。初演後は上演機会が激減しましたが、この序曲だけは頻

繁に演奏されています。

序曲は、やはり本編の旋律を素材に構成され、魔法の角笛を表すホルンが重要な役割を果たします。遅い序奏部は、柔らかな角笛で始まり、木管楽器の軽やかな動きが妖精たちを表します。快速調の主部に移ると、活気のある主題をもとに高揚し、2回の角笛に続いて柔和な主題や跳ねるような動きが登場。その後は各主題が交代しながら突き進みます。

様々な音楽が混在したボーダーレスな協奏曲

ここでフリードリヒ・グルダ (1930–2000) の**チェロ協奏曲**が披露されます。ウィーン生まれのグルダは20世紀を代表するピアニストの一人。古典を得意としながらジャズも演奏するなど多才ぶりを発揮しました。この曲は、1980年にオーストリアのチェロ奏者ハインリヒ・シフの依頼で書かれ、翌年10月に初演された作品。正式名称は「チェロと吹奏楽のための協奏曲」で、管楽合奏をバックにした珍しい協奏曲です。しかもそれにドラムセットやギターが加えられ、ベースも通常のコントラバスとジャズベースの両方が用いられるという破格の編成が特徴です。

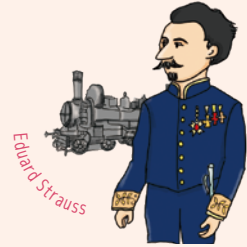


年代的には“現代音楽”に属する作品ですが、音楽自体はクラシック、ロック、ジャズ、民族音楽 (田舎風のプラスバンド?) など様々な要素が混在したボーダーレスな内容。今回は、全5楽章・約30分の全曲から、ロックのリズムによる**第1楽章「序曲」**、まさに牧歌的で美しい音楽に、民族音楽風の軽妙なワルツが加わる**第2楽章「牧歌」**、お祭り騒ぎのような**第5楽章「終曲：行進曲風に」**が演奏され、穏健な音楽を挟んでノリノリの音楽が展開されます。

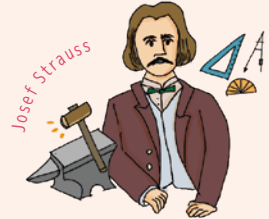
ウィーンのポルカの軽快な響きに乗って

ここからは、ウィンナ・ワルツの全盛期を築いたシュトラウス三兄弟のポルカを主体としたステージです。

まずは、ヨハン2世とヨーゼフの弟**エドゥアルト・シュトラウス** (1835-1916) の『**蒸気をあげて**』。彼は、兄たちの楽団を引き継いで活動し、300曲ほどの作品を残しています。中でも得意だったのがポルカ・シュネル (快速ポルカ)。1871年2月の工業舞踏会で初演された本作もその1つで、蒸気機関車を描写した軽快なポルカです。



かわってヨハン2世の弟 (=エドゥアルトの兄) **ヨーゼフ・シュトラウス** (1827-1870) の『**鍛冶屋のポルカ**』。ヨーゼフは、1853年に兄の代役を務めたのを機に建築技師から転身し、早世するまでの17年間に300もの作品を残しました。作品の評価は高く、才能は兄以上とも評されています。



本作は遅めのポルカ・フランセーズ (フランス風ポルカ)。1869年3月、金庫メーカーのヴェルトハイム商会が、耐火金庫2万個製造を記念して開いた花火付き舞踏会のために作曲されました。ヨーゼフらしい優美な音楽ですが、鍛冶屋が使う鉄床が、のどかでユーモラスな雰囲気^{かなとこ}を醸し出します。

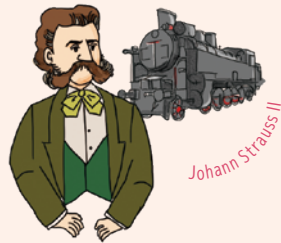
再びエドゥアルトの登場。彼の代表作である**ポルカ・シュネル『テープは切られた』**が元気よく奏されます。本作は、1869年2月、オーストリアのカイザー・フェルディナント・北部鉄道の開業30周年記念舞踏会用に書かれた快速ポルカ。スタートした汽車が軽快に疾走する楽しいナンバーです。なお、出発合図の笛を交えた演奏もよく行われていますし、コードではブラシで奏される小太鼓が汽車を表します。

堂々とした行進曲から快速ポルカへ

ここで気分を変えて、イタリア・ロマン派オペラの巨匠 **ジュゼッペ・ヴェルディ** (1813-1901) の歌劇『アイーダ』より「凱旋行進曲」が演奏されます。『アイーダ』(1871年初演)は、スエズ運河の開通を記念して新設されたカイロの歌劇場からの依頼による、ヴェルディの集大成的オペラ。エジプトの奴隷となったエチオピア王の娘アイーダと、エジプトの将軍ラダメスの恋に、エジプト王の娘アムネリスが絡んだ三角関係の悲劇です。「凱旋行進曲」は、第2幕第2場、エチオピア軍を打ち破ったラダメスたちがエジプトに凱旋するシーンにおける華麗な音楽。今やサッカーの応援歌としてもお馴染みです。オペラではアイーダ・トランペットという特別な楽器(演奏会では普通のトランペットの使用が多い)が舞台左右でファンファーレを奏でる、華やかで堂々とした行進曲です。



締めくくりは、「ワルツ王」と称された長兄 **ヨハン・シュトラウス 2世** (1825-1899) の **ポルカ・シュネル『観光列車』**。ウィーンとイタリアのトリエステを結ぶ山岳鉄道の開通10周年にして、オーストリアの鉄道路線が3500キロに達した1864年の1月に、工業会社協会の舞踏会で初演された快速ポルカです。汽車の走る様子が警笛やブレーキ音も交えて軽妙に描かれます。



しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、Web、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)、「吹奏楽編曲されているクラシック名曲集」(音楽之友社)。